OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪方言の平叙文における「ネンナ」：「ネン」に固有の意味特徴
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2019, 16, p. 35-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73638
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大社会言語学研究ノート』第 16 号（2019 年 7 月）35-54

大阪方言の平叙文における「ネンナ」

―「ネン」に固有の意味特徴―

野間　純平

【キーワード】大阪方言、ノダ、ネン、ンヤ

【要旨】

本稿は、大阪方言のノダ相当形式である「ネン」が、同じくノダ相当形式である「ンヤ」と比べて意味的にどのように異なるかを「ネンナ」という形式を通して考察したものである。具体的には、「ネンナ」という形式を、「ネン」が「ンヤ」に置き換えられるかという観点で分類し、そこから「ンヤ」にはない「ネン」に固有の意味特徴を明らかにした。本稿で明らかにしたことは以下のとおりである。

(a)「ネンナ」の持つ用法のうち、〈確認要求〉と〈把握〉は「ンヤナ」に置き換えることができ、〈認識共有〉と〈情報提示〉は「ンヤナ」に置き換えることができない。

(b)「ンヤナ」に置き換えられない〈認識共有〉と〈情報提示〉の「ネンナ」には、「話し手の判断を介さない」「聞き手に一方的に伝える」という共通した意味特徴がある。「ンヤナ」に置き換えられる〈把握〉および〈確認要求〉の用法はこの特徴を欠いている。

(c)「ンヤナ」にはなく「ネンナ」に固有の意味特徴は、文末の「ネン。」が持つ「ンヤ。」にはない固有の意味特徴とおおむね一致しており、ここから、少なくとも文末および「ナ」が続く環境においては、「話し手の判断を介さない」「聞き手に一方的に伝える」が「ネン」に固有の意味特徴であると考えられる。

1.　はじめに

大阪方言には、標準語の「ノダ」に相当する形式として、以下のような「ンヤ」と「ネン」が存在する。

(1) A：そないに急いでどないしたん？（そんなに急いでどうしたの？）
　　B：締め切りまで時間ない｛ネン／ンヤ｝。（締め切りまで時間がないんだ。）

(1) における B の発話では、文末に「ネン」および「ンヤ」のどちらも使用することができる。この 2 つの形式は、どちらも標準語の「ノダ」に相当するが、その意味の違いについては、先行研究で様々に指摘されている。

例えば、「対事的ムード」（野田 1997）や「把握」（日本語記述文法研究会編 2003）と呼ばれる次のような用法においては、「ンヤ」は使用できるが「ネン」は使用できない。

(2)（独り言で）へー、あいつ運転する｛*ネン／ンヤ｝。

(2) は、実際に運転している様子を目撃したり、誰かに聞いたりして、「あいつが運転する」ことを話し手が把握したことを表す発話である。このとき、標準語の「運転するんだ」と同様に「ンヤ」は使えるが、「ネン」に置き換えることはできない。このことから、「ネン」は

「対事的ムード」あるいは「把握」用法を持たないとされる。しかし、同じ状況設定でも、次のように終助詞「ナ」が続くと「ネン」も使えるようになる。

(3)（独り言で）へー、あいつ運転する｛ネンナ／ンヤナ｝。

このことから、当該形式の後に何も続かずに文が終わる場合と、別の終助詞などが続く場合とでは、「ネン」と「ンヤ」の分布が異なると言える。

本稿では、このことに注目し、「ネン」に「ナ」が後続する「ネンナ」という文末形式に絞って、「ンヤナ」と置き換えられるかどうかという観点でこれを分類する。それによって、「ンヤ」にはない「ネン」が持つ固有の意味特徴を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節では、先行研究をもとに「ネン」と「ンヤ」の特徴をまとめる。3 節ではそれを踏まえて、両形式の意味の違いを明らかにするうえでの問題点を指摘する。4 節では「ネンナ」を「ンヤナ」との置き換えの可否という点で分類する。5 節では、4 節の内容を踏まえて「ネン」が持つ固有の意味特徴について考察する。6 節はまとめである。

なお、本稿における例文（作例）の適格性判断は、大阪府八尾市で言語形成期を過ごした筆者の内省による[1)]。また、例文は読みやすさを考慮して漢字かな交じりで表記し、問題となる部分のみカタカナで表記する。*は当該の文や形式が文法的に不適格であることを表し、#は運用的に不適切であることを表す。また、?は不適格とまでは言わないが、不自然であることを表し、??は?よりも容認度が落ちることを表す。

2.　「ンヤ」と「ネン」の性質

本節では、先行研究をもとに、大阪方言の「ネン」と「ンヤ」の形式的な特徴（2.1 節）と意味的な特徴（2.2 節）をまとめる。意味的な特徴については、その記述の問題点および本稿の立場について、続く 3 節で詳述する。

2.1.　形式的特徴

本稿で取り上げる「ンヤ」と「ネン」は、形式面において大きな異なりがある。「ンヤ」は標準語の「ノダ」と形態的に対応する形式だが、「ネン」は形態的な対応がない[2)]。以下では、形式面における「ンヤ」と「ネン」の違いを、主に野間（2013）をもとに記述する。なお、本稿では「ネン」の意味を「ンヤ」と対照することで明らかにするため、野間（2013）で記述されている「ネヤ」と「ネンヤ」は取り上げない。

「ンヤ」は、標準語の「ノダ」と同様に、準体助詞の「ン」とコピュラの「ヤ」で構成されている。そのため、「降ランノヤ」のように「ン」は撥音の直後で「ノ」という形をとり

1)　筆者は 1987 年生まれ、男性。居住歴は以下のとおり。
0-28：大阪府八尾市、28-32：島根県松江市

2)　標準語の「ノダ」との形態的な対応がないにもかかわらず「ネン」を「ノダ相当形式」とするのは、意味のうえで対応するところが大きいからというだけでなく、「ンヤ」が変化して「ネン」ができた（小杉 2003、野間 2014a など）と考えられるためである。

[3]、「ヤ」はコピュラと同様のふるまいをする。「ヤ」がコピュラとしてふるまうことは、例えば次のような例からもわかる。

（4） a. 今日は雨ヤ。
　　 b. 今日は雨降るンヤ。
（5） a. 昨日は雨ヤッタ。
　　 b. 今日は雨降るンヤッタ。
（6） a. 明日は雨ヤロ。
　　 b. 明日は雨降るンヤロ。

（4）（5）（6）のそれぞれ a は名詞「雨」にコピュラの「ヤ」が接続した名詞述語文で、b は「降る」に「ンヤ」が接続したノダ文である。（4）は「ヤ」が基本形で、（5）と（6）はそれをそれぞれ過去形と推量形にしたもので、ab どちらにおいても「ヤ」が「ヤッタ」「ヤロ」と語形変化している。

また、大阪方言では、真偽疑問文において「ヤ」が現れることができない。このことは、以下に示すように「ンヤ」に関しても同じである。

（7） a. 明日は雨｛φ／*ヤ／カ／*ヤカ｝？
　　 b. 明日は雨降る｛ン／*ンヤ／ンカ／*ンヤカ｝？

（7）は、（4）を真偽疑問文にしたものである。（4）と同様に a が名詞述語文、b がノダ文となっているが、どちらの場合も「ヤ」が現れることができない。疑問の終助詞「カ」は真偽疑問文において必須ではなく、「ヤ」と共起することもできない。以上のように、「ンヤ」は準体助詞とコピュラの組み合わせに由来し、文法的なふるまいもそれぞれに準じている。したがって、疑問文における「ン」のような形式も、「ンヤ」のバリアントとして扱う[4]。

一方、「ネン」は「準体助詞＋コピュラ」という構成になっておらず、これ以上分けることができない。そのため、「ンヤ」のように活用することがない。

（8）今日は雨降るネン。
（9）*今日は雨降るネンタ。
（10）*明日は雨降るネンロ。

（8）（9）（10）はいずれも「降る」に「ネン」が接続しているが、（9）や（10）のように過去形や推量形になることはできない[5]。

また、以下に示すように、真偽疑問文では使用できず、疑問の終助詞「カ」と共起することもできない。

（11）明日は雨降る｛*ネン／*ネンカ｝？

なお、（12）に示すように、「ンヤ」と同様、補充疑問文には現れることができる。ただし、その場合も上昇調では発音されず、単純な問いかけよりも詰問や反語のニュアンスを帯び

3） 「ン」と「ノ」の分布に関して、詳細は野間（2014b）を参照されたい。
4） ただし、平叙文における「ンヤ」と「ン」がバリエーションの関係にあるとは限らない。このことは 5.1.1 節で言及する。
5） 「ネンヤッタ」「ネンヤロ」という形をとることはできるが、これらは「ネン」が語形変化したものとは考えない。詳細は野間（2013）を参照されたい。

る傾向がある。このような補充疑問文に現れる「ネン」については、本稿では取り上げない。本誌所収の高木（2019）を参照されたい。

（12）どこ行く｛ネン／ン／ンヤ｝？

以上に示したように、「ネン」は「ンヤ」のように「準体助詞＋コピュラ」の構成を持たず、語形変化もしない。

さらに、接続に関して付言しておくと、「ネン」は述語の過去形に直接つくことができず、過去接辞の「タ」を意味的に取り込んだ[6]「テン」という形をとる[7]。

（13）夏休みに旅行行って｛*きたネン／きテン｝。

「ネン」と「テン」とでは述語への接続のあり方が異なるが、テンスの対立をなしていることから、「テン」も「ネン」のバリアントと考える[8]。

以上、「ンヤ」と「ネン」のバリアントを簡単に整理した。以下では、それぞれの語形に言及する場合はかぎかっこつきで表記し、各バリアントも含めた形態素に言及する場合はかぎかっこなしで表記する。

2.2.　意味的特徴

大阪方言のネンは、形式だけでなく意味のうえでもンヤとは異なるということが、先行研究において指摘されてきた。

山本（1962）は、特にコピュラの「ヤ」に後接するネンに対して「念を押し、強める気持ち」を表す文末詞であると指摘している。尾上（1999:45）でも同様に、「「ネン」が「ノダ」とはちがって、ある種の表現姿勢を表すだけの終助詞のようなものに変質している」と述べられている。また、大阪ではないが、兵庫県播磨方言の「ネン」を取り上げた神部（1996）には、「ネン」は「ノヤ」に比べて断定機能が弱化・軟化しているという指摘がある。さらに、中井（1997:21-22）は、京都市方言の「ネン」を、「行くニャ」「行くンヤ」「行くノヤ」のように用いられるノダ相当形式「ニャ」「ンヤ」「ノヤ」と比較して、「「ネン」が「のだよ」に相当するとすれば、「ニャ・ンヤ・ノヤ」には「のだ」の部分しか含まれていないから意味がずれることになるが、ずれの詳細は未詳である」と述べている。「詳細は未詳」としているが、ネンが他のノダ相当形式とは異なる意味を持つことを指摘し、ネンを「のだよ」に相当するものとしている。同様に、真田監修（2018:421）では「ネン」の標準語訳として「〜のだ。〜のだよ。」と書かれている。以上のように、ネンが持つ意味的な特徴として「念押し」「断定機能が弱い」といったことが指摘されてきたが、十分な記述とは言いがたい。

それに対して、松丸（1999）と野間（2013）では、標準語の「ノダ」を分析した野田（1997）

6）　ここでいう「「タ」を取り込んだ」とは、「タネン」が変化して直接「テン」が成立したという意味ではない。「テン」の成立については野間（2014a）を参照されたい。

7）　岸江（2000）や小笠原（2014）が報告するように、話者の地域や年齢によっては、「きたネン」のように過去形に「ネン」が直接つく形も使用されることがある。しかし、このような「タネン」の形は筆者の判断では一切許容されず、筆者と同じ判断は一定の地域および世代では共有されていると考えられるため、本稿では除外する。

8）　「飛んだ」のように「タ」が「ダ」になる場合、「飛んデン」のように「テン」は「デン」になる。これもネンのバリアントと考える。

の枠組みをもとに、ンヤとネンの違いを記述している[9)]。松丸（1999）と野間（2013）のどちらにも共通しているのは、ネンが「対事的ムード」の用法を持たないことである。「対事的ムード」の用法とは、標準語の「ノダ」の機能を記述した野田（1997）によるもので、「ノダ」の直前までの内容を、話し手が把握したことを表す用法のことである。

（14）（独り言で）あれ、あの人、たばこ吸うんだ。

（14）は聞き手に発せられたものではなく、その現場を目撃するなどして、「あの人がたばこを吸う」ことを話し手が把握したことを表している。このような「対事的ムード」の用法において、以下に示すようにンヤは使えるがネンは使えない。

（15）（独り言で）あれ、あの人、たばこ吸う｛*ネン／ンヤ｝。

一方、命題内容を聞き手に提示する「対人的ムード」の用法においては、ンヤもネンも使用可能である。

（16）A：そないに急いでどないしたん？

B：締め切りまで時間ない｛ネン／ンヤ｝。　（(1) 再掲）

（16）では、B が A の質問に対して答えているが、このときはネンもンヤも使用できる。このように、聞き手に向けられた「対人的ムード」の用法ではネンとンヤが両方使える。

しかし、野間（2013）では、「対人的ムード」の用法であっても、次のように会話の最初に唐突に情報を提示する場面では、ンヤの許容度が落ちることが指摘されている。

（17）（唐突に）あんなー、おれ今度東京に行く｛ネン ／??ンヤ｝。

（17）の「あんなー」は標準語の「あのね」に当たる形式で、聞き手に何かを打ち明ける前置きの表現として用いられる。このような場合、ンヤは不自然になり、ネンの場合は自然となる[10)]。

以上のような「対人的ムード」の用法における（16）と（17）の違いに対して、野間（2013）では「命題処理度のスケール」を用いて説明を行った。「命題処理度のスケール」とは、「ノダの直前までの命題の内容を、話し手がどれだけ頭の中で処理したか」（p.63）を表すものである。この処理が多いほどンヤの許容度が高くなり、ネンの許容度が下がる。一方、処理が少ないほどンヤの許容度が低くなり、ネンの許容度が高くなる。（17）のように、発話時に話し手の中で命題内容が「処理済み」の場合はネンのほうが好まれるが、以下のような場合はネンが許容されにくい。

（18）A：C さんはどこ行ったん？

B：そういえばどこ行ったんやろ。あ、さっきまでここにあった C さんのかばんがない。たぶん買い物に行ってる｛?ネン／ンヤ｝。

（18）において B は、「C さんが買い物に行っている」という情報を、C さんのかばんがなくなっているという事実から推測したうえで、A さんに提示している。このとき、かばんがなくなっているという事実の発見と、そこからの推測という心的処理が話し手の中で行わ

9）松丸（1999）は京都市方言を、野間（2013）は大阪方言を対象としている。

10）松丸（1999）では、このような例でもンヤが問題なく許容されている。おそらく大阪と京都の地域差と考えられるが、少なくとも筆者の判断では、3.1 節の（19）のような場面設定でなければ、ンヤはかなり不自然である。

れているため、ネンが不自然になると説明している。

3.　問題のありか

前節で述べたように、大阪方言のンヤとネンの異同については、形式と意味の両面において一定の記述が行われてきた。しかし、意味の記述に関して、先行研究には大きく 2 つの問題があると考えられる。1 つは、「命題処理度のスケール」が道具立てとして不十分な点である。もう 1 つは、ンヤやネンといった形式で文を終える例のみを対象としており、後に別の形式が続く例が検討されていない点である。以下、3.1 節および 3.2 節でそれぞれの問題点について詳述し、3.3 節ではそれを踏まえて本稿の立場を述べる。

3.1.　「命題処理度のスケール」の問題

野間（2013）の記述は、山本（1962）や尾上（1999）で指摘されたネンの意味的特徴と大筋で一致していると考えられるが、「命題処理度のスケール」が道具立てとして不十分であると考えられる。例えば、(17) のように「処理済み」の情報をいきなり提示する場面でも、次のように深刻なトーンになれば、ンヤも不自然ではなくなる。

(19)（唐突に）あんな、黙っとったけど実はな、おれ今度東京に行く｛ネン／ンヤ｝。

(19) は、「今度東京に行く」という事実を聞き手に伝えるのをためらっていたが、ようやくそれを打ち明けた場面である。このような場合、ンヤを使っても (17) のような不自然さはない。(17) と (19) の違いは、情報を提示するにあたっての「ためらい」や「前置き」の有無であり、話し手の頭の中での「命題処理度」に違いはないと考えられる。この点において、「命題処理度のスケール」はンヤとネンの意味的な違いを説明しきれていないことになる。さらに、大野 (2015) が指摘するように、聞き手との会話における話し手の心的処理のプロセスにおいて、聞き手とのインタラクションが問題になるはずだが、ほとんど考慮されていない[11]。以上のことから、「命題処理度のスケール」は、ネンとンヤの意味の違いの一面を説明してはいるものの十分とは言えず、道具立てとしては再検討が必要だと言える。

3.2.　文末環境と非文末環境

もう 1 つの問題は、先行研究が対象にしているのが、ンヤやネンといった形式で文を終える例のみであり、後に別の形式が続く例が検討されていない点である。例えば本稿冒頭の (2) や 2.2 節の (15) では、ネンがンヤと違って「対事的ムード」の用法で使えないことが示されているが、次のように、ここに終助詞「ナ」が後接すると、ネンも許容される。

(20)（独り言で）あれ、あの人、たばこ吸う｛ネンナ／ンヤナ｝。

(20) からは以下のようなことが考えられる。すなわち、「ネンは対事的ムードの用法を持たない」というのは後に何も続かずに文が終わる場合に限ったことであり、後に何かが続くと、「把握」に関するネンとンヤとの意味の違いがいわば「中和」されてしまうということ

11）聞き手の質問に答える場合、一方的に情報を提示する場合に比べて命題処理度が大きくなることは野間 (2013) で述べられているが、話し手と聞き手のインタラクションはもっと複雑であるはずである。

である。

さらに、同様のことは、次のように接続助詞が続いた場合にも当てはまる。

（21）（唐突に）あんなー、おれ今度東京に行く｛ネンケド／ンヤケド｝、おみやげ何がいい？

（21）は（17）に接続助詞「ケド」を続けて複文にしたものである。（17）ではンヤが少し不自然になったが、（21）ではネン・ンヤともに問題なく使用でき、大きな意味の違いもない。これもまた、ネンとンヤの違いが「中和」された例だと言える。

以上のように、ンヤとネンの後に別の形式が続く場合、両者の意味が「中和」される現象が観察される。ただし、次のように、後に別の形式が続いていても、ンヤとネンのどちらかしか使えない場合もある。

（22） A：来月のゼミ旅行、行く？

B：いやー、どうしよ。迷ってる｛ネンナー／#ンヤナー｝。

（22）は、ゼミ旅行への出欠を尋ねられたBが、「迷っている」という内容をAに返答している会話である。Bの発話は、標準語だと「迷ってるんだよね」に相当すると考えられる。このとき、「ネンナー」は使えるが「ンヤナー」は使えない。

以上のように、ノダ相当形式に終助詞などの別の形式が続く場合、ネンとンヤの意味が「中和」されることもあれば、されないこともあることがわかる。このことを踏まえると、少なくともンヤとネンの意味・機能の違いを記述する際には、後に何も続かずに文が終わる場合（以下、本稿では「文末」とする）と、別の形式が続く場合とをいったん区別する必要があると考えられる。さらに、別の形式が続く場合は、意味上の「中和」が起こるか否かを検討する必要があるだろう。

3.3. 本稿の立場

以上、ネンとンヤの意味記述に関する先行研究の問題点を指摘した。大阪方言におけるネンとンヤの意味の違いを明らかにするために、松丸（1999）では、主にネンとンヤのどちらか一方が使用される用例に注目することで、両形式の違いを明らかにした。野間（2013）では、松丸（1999）が明らかにしたことを踏まえて、ネンとンヤのどちらか一方のみ使用される用例だけでなく、どちらも使用される用例についてもネンとンヤ（およびネヤ・ネンヤ）の意味の違いを説明するために、「命題処理度のスケール」を用いた。しかし、既に述べたように、そのスケールは十分なものとは言いがたい。さらに、文末環境と非文末環境とで両形式の分布が異なるという点も考慮されていなかった。

以上の流れを踏まえたうえで、本稿では、次のように考える。すなわち、ネンとンヤの意味の違いを明らかにするためには、実際の言語運用における用例を個別に観察し、「命題処理度」以外にも、話し手の発話意図や談話展開など、あらゆる要素を検討する必要があると考える[12)]。その手がかりとして、ネンとンヤのどちらか一方のみが使用できる用法の範囲を

12）本稿では、野間（2013）で示された「命題処理度のスケール」が道具立てとして不十分であると考えるが、その内容自体を否定する意図はない。道具立てを十分なものにするための準備として本稿を位置付けている。

明らかにしておくことが有効だろう。なぜなら、そのような用法こそが、ネンやンヤに固有の意味特徴であり、その特徴が、ネンとンヤが重なる、すなわち両方使用できる場合の両者の意味的な違いにも少なからず反映されると考えられるからである。

ただし、3.2 節で指摘したように、ネンとンヤの分布は、文末環境と非文末環境とで異なることがある。したがって、非文末環境についても、ネンとンヤの分布、特に、どちらか一方しか使えない領域を特定する必要がある。文末環境については、松丸（1999）および野間（2013）でその作業が行われたが、非文末環境については未整理である。

そこで、本稿では、ネンおよびンヤに終助詞「ナ」が後続する「ネンナ」と「ンヤナ」の用例を取り上げ、それらが互いに置き換え可能か否かという点に注目する。特に、（20）や（22）のような、ネンに「ナ」が後接した「ネンナ」という形式を対象とし、「ネンナ」が「ンヤナ」と置き換えられるものと置き換えられないものに分類する。これは、「ンヤナ」はいずれも「ネンナ」に置き換えることができ、「ンヤナ」専用の用法がみられないためである。一方、（20）や（22）が示すように、「ネンナ」の中には「ンヤナ」に置き換えられるものと置き換えられないものが存在する。これらを整理することによって、ネンとンヤの意味の違い、特にンヤにはないネンが持つ固有の意味的特徴に迫れるのではないかと考える。

4.　「ネンナ」の諸用法

前節で述べた問題意識のもと、本節では、大阪方言の「ネンナ」という形式を取り上げ、それを「ンヤナ」と置き換えることができるかという観点で分類する。以下、4.1 節では「ンヤナ」と置き換えられる「ネンナ」を、4.2 節では「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」をそれぞれ取り上げる。

なお、本稿で取り上げる「ネンナ」および「ンヤナ」は、すべて平叙文で使用されるものであり、「どこ行くネンナ」「どこ行くンナ」のような補充疑問文で使用される「ネンナ」「ンナ」は対象外とする。「どこ行くンナ」からわかるように、補充疑問文では「ナ」がンヤに後接する際にコピュラを伴わない。この点において、本稿の対象とする平叙文の「ナ」とは統語的性質が異なっており、また、「ナ」の出自も異なると考えられるため、別に扱うこととする。補充疑問文における「ナ」については高木（2018）や本誌所収の高木（2019）を参照されたい。また、平叙文で使用される「ンヤナ」は「ンナ」という形をとることがない。ンヤに終助詞「ナ」が後接する際にコピュラの「ヤ」が必須となるためである。

4.1.　「ンヤナ」と置き換えられる「ネンナ」

「ンヤナ」に置き換えられる「ネンナ」の用法は、〈確認要求〉と〈把握〉の 2 つに分類できる。前者は発話が聞き手に向けられているのに対して、後者は必ずしも聞き手には向けられていないという違いがある。以下、本稿では「ネンナ」の用法を〈　〉に入れて示す[13)]。

13）本稿でいう「用法」は、「ネンナ」「ンヤナ」が持つものと考え、「ネンナ」のうち「ナ」が〈確認要求〉を表す、といった考え方は本稿ではしない。なぜなら、3.2 節で指摘したように、終助詞が続くとンヤとネンのふるまいが異なることがあり、「ネンナ」を意味のうえで「ネン＋ナ」と考えることに慎重になる必要があると考えているからである。

ここで〈確認要求〉と呼ぶ用法の「ネンナ」は、以下のようなものである。

（23）来週の飲み会、おまえも行く｛ネンナ／ンヤナ｝。

（24）もう宿題終わっ｛テンナ／たンヤナ｝。

（23）において、話し手は「聞き手も来週の飲み会に行く」と考えており、その真偽を改めて聞き手に確認している。（24）では、「宿題が終わった」と話し手は思っており、その真偽を聞き手に確認している。このように、話し手が既に認識している命題内容の真偽の確認を聞き手に求めるのが〈確認要求〉である。

このとき、「ナ」の音調には 2 種類ある。1 つは、「ナ」が高くついて短く発音されるもので、もう 1 つは、そこから「ナー」と長呼しつつ下降するものである。「ナ」の音調と表される意味の関係については、「ナ」の問題となり、本稿の目的から外れるので、ここでは詳しく言及しないが、前者に比べて後者の音調ほうが「確認」の色合いが濃く、前者の音調はこの後に述べる〈把握〉に連続する[14)]。

また、「ナ」の部分を高く平らに長呼すると、少しニュアンスが変わる。

（25） A：C ちゃん、うれしそうにして、どないしたん？

B：（C に向かって）日曜日にディズニーランド行く｛ネンナー／ンヤナー｝。

C：うん、そうやねん。ええやろ。

（25）は、日曜日の予定が楽しみでそわそわしている C（小さな子供が想定される）が「日曜日にディズニーランドに行く」ことを B は知っていて、A は知らないという場面である。このとき、C の事情を知っている B が、そのことを C に対して「ネンナ」を使って確認することで、間接的に A の質問に答えている。（23）や（24）とは音調が異なるものの、同じ〈確認要求〉と考えられる。

次に、〈把握〉の「ネンナ」は、2.2 節で取り上げた、野田（1997）でいう「対事的ムード」のものである。ここでは、日本語記述文法研究会編（2003）で用いられている「把握」という用語を使う[15)]。既に 3 節で示したように、この〈把握〉の「ネンナ」は「ンヤナ」に置き換えることができる。

（26）（独り言で）あれ、あの人、たばこ吸う｛ネンナ／ンヤナ｝。（（20）再掲）

（27）（相手がたばこを取り出すのを見て）あれ、おまえたばこ吸う｛ネンナ／ンヤナ｝。

（28）（友達と外を歩いているときに、最近まであった店が閉店しているのを見て）

この店、もうつぶれ｛テンナ／たンヤナ｝。

（26）は、その現場を目撃するなどして「あの人がたばこを吸う」ことを知り、それを話し手が独り言としてつぶやいたものである。（27）は、（26）と同様の内容が聞き手に向けられたものである。（28）の場合も聞き手が存在する。これらが示すように、この〈把握〉用法は、聞き手の有無に関係なく、話し手が当該命題内容を把握したことを示すものである。この場合、「ネンナ」は「ンヤナ」に置き換えが可能である。

以上、「ンヤナ」と置き換えが可能な「ネンナ」には、〈確認要求〉と〈把握〉の 2 種類が

14）標準語では、前者が「んだね」、後者が「んだよね」におおむね相当すると考えられる。

15）日本語記述文法研究会編（2003）では、「ノダ」の用法の 1 つとして「把握」という用語を当てているが、本稿では「ネンナ」および「ンヤナ」の用法としてこの用語を用いる。

あることを述べた。

4.2.　「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」

「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」は、〈認識共有〉と〈情報提示〉の 2 つに分けられる。この 2 つは、談話内で現れる位置が異なるが、聞き手が知らない情報を提示するという点で共通している。以下、それぞれ分けて詳しく述べる。

4.2.1.　〈認識共有〉の「ネンナ」

〈認識共有〉の「ネンナ」とは、聞き手が知らない情報を、本題の前置きとして導入する際に用いられる「ネンナ」である。このとき、「ナ」は上昇調で発音される。以下に示すように、〈認識共有〉の「ネンナ」は「ンヤナ」に置き換えることができない。

（29）あんなー、今度出張で福岡行く｛ネンナ／#ンヤナ｝。でもホテルが全然空いてへんねん。

（30）こないだな、久しぶりに地元帰ったらな、高校の同級生の A に会っ｛テンナ／#たンヤナ｝。でもあいつめっちゃ見た目変わっとっ｛テンナ／#たンヤナ｝。だから最初全然わからんかったわ。

（29）では、本題である「出張で泊まるホテルに空きがなくて困っている」という話の前置きとして、「今度出張で福岡へ行く」という情報を提示し、前提を共有している。（30）は、最近のエピソードを語っている場面で、最終的に「久しぶりに会った同級生の見た目が変わっていてわからなかった」という話にたどり着くまでの前提情報が「ネンナ」によって導入されている。ここで使用されている「ナ」は、（30）の他の部分、例えば「こないだ<u>な</u>」「帰ったら<u>な</u>」のように使用されている間投助詞の「ナ」と同じで、ターンを維持しつつ挟まれる形式であると言える。

なお、〈認識共有〉の「ネンナ」は、標準語では次のような「んですね」に相当する。

（31）昨日、デパートに買い物に行った<u>んですね</u>。そうしたら、中学校時代の先生とばったり会って、少し立ち話をしたんですよ。

（32）　A：大会に向けての準備が十分できなかったという意見がありますが」
　　B：私は問題ないと思う<u>んですね</u>。十分な準備なんて、どのチームでも難しいんですから」　　（以上、日本語記述文法研究会編 2003:260）

これらの「んですね」は「のね」に置き換えることができるが、「んだね」には置き換えられない。

（33）昨日、デパートに買い物に行った｛の／*んだ｝ね。そうしたら、中学校時代の先生とばったり会って、少し立ち話をしたんだよ。

（34）　A：大会に向けての準備が十分できなかったという意見がありますが
　　B：私は問題ないと思う｛の／*んだ｝ね。十分な準備なんて、どのチームでも難しいんですから

〈認識共有〉という用語は京野・堀江（2016）によるものだが、その意味・用法に関しては、それ以前から以下のような指摘がある。

（35）話し手が複数の文を続けて発話する場合に、重要な情報を伝える文の前提として、相対的に軽い情報を「のだ」によって表す文に「ね」が付加されるものである。
（日本語記述文法研究会編 2003:259）

（36）聞き手の認識していないことを提示する対人的「のだ」に、一致を表す「ね」が加わることによって、「〜のだ」で示した内容を、聞き手にその場で認識させ、話を次に進めようとする話し手の意図が表される。（野田 2002:286）

（29）や（30）に示した大阪方言における〈認識共有〉の「ネンナ」は、（31）から（34）に示した標準語の「んですね」および「のね」と対応する。（33）と（34）を大阪方言に訳すと以下のようになる。

（37）昨日、デパートに買い物に｛行っテンナ／#行ったンヤナ｝。そしたら、中学校時代の先生とばったり会って、ちょっと立ち話してん。

（38） A：大会に向けての準備が十分できなかったという意見がありますが
B：私は問題ないと思う｛ネンナ／#ンヤナ｝。十分な準備なんて、どのチームでも難しいんやから

以上、本節では、「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」の用法の 1 つとして〈認識共有〉を取り上げ、それが標準語の「のね」および「んですね」に相当することを述べた。

4.2.2. 〈情報提示〉の「ネンナ」

次に、〈情報提示〉の「ネンナ」について述べる。〈情報提示〉の「ネンナ」は、〈認識共有〉の「ネンナ」と同様に、聞き手が知らない情報を提示するものだが、「ナ」が上昇調ではなく高く平らに伸ばされるという点で〈認識共有〉とは異なる。また、〈認識共有〉のように前置きとして発話されるものではなく、問いかけに対する返答として用いられることが多い。以下に例を示す。

（39） A：来月のゼミ旅行、行く？
B：いやー、どうしよ。迷ってる｛ネンナー／#ンヤナー｝。（（22）再掲）

（40）（最近 B が知り合った男性について）
A：もう 2 人で会ったりしてんの？
B：あー、まだしてない｛ネンナ／#ンヤナ｝。（中西・沖 2011:56-57[18)]）

（41） B：なんか最近はまってることある？
A：最近はまってること。
B：なんか、どっか習い事してるとか。
A：習い事やめ｛テンナ／#たンヤナ｝、最近。
B：何やってたん？
A：ジム行っててんけどー （中西・沖 2011:43）

（39）では、A の問いかけに対して、B が「ネンナ」をつけて答えている。また、（40）で

18）本稿に合わせて、原文の表記を一部変更している。また、原資料では「ネンナ」が使われており、「ンヤナ」への置き換えおよびその判断は筆者による。（41）も同様である。

は、最近知り合った男性と 2 人で会っているのかという A の質問に対して B が「ネンナ」を用いて返答している。(41) では、何か習い事をやっているかという B の問いに対して、A が「習い事を最近やめた」と答えている。これらの例に共通するのは、「ネンナ」によって伝達される内容が、聞き手の知らない情報であり、「ンヤナ」には置き換えられないということである。

また、「ネンナ」を用いると、単に言い切るのではなく、聞き手の反応をうかがいつつ伝達するというようなニュアンスを持つ。例えば (39) において、話し手は旅行に行くかどうか迷っているという内容を聞き手に提示しているだけでなく、それを聞いて相手がどのような反応をするかうかがっていると解釈できる。この場合であれば、「私も行くから一緒に行こうよ」という誘いや、「行かないほうがいいよ」という助言が想定できる。(40) や (41) では、相手の質問に込められた期待 (「話題の男性と付き合いはじめた」「習い事をしている」など) に沿っていない内容を返答しているためか、ある種の話し手のためらいや言いよどみを伴う。この「ためらい」や「言いよどみ」は「聞き手の反応をうかがう」という〈情報提示〉の「ネンナ」の性質によるものであり、文脈によって帯びるニュアンスが異なる。次の例を見られたい。

(42)　A：C さんて D さんと付き合ってるんやろ？
　　B：と思うやろ？　それがちゃうネンナー。
　　A：え、ちゃうの？　じゃあ誰なん？

では、「C さんが D さんと付き合っているというのは嘘だ」という A が知らない情報を B が提示している。「と思うやろ？」という B の前置きからもわかるように、B の提示した情報は、A にとって意外なものであり、A が興味を示す情報であると予想される。B はそれをわかったうえで、もったいぶるように「ネンナ」で情報を提示しているのである。

以上に示したように、〈情報提示〉の「ネンナ」とは、聞き手の知らない情報を、その情報を聞いた聞き手の反応をうかがいつつ提示するものである。4.2.1 節で取り上げた〈認識共有〉の「ネンナ」もまた情報を「提示」していることには変わりないが、ここでいう〈情報提示〉とは異なる。〈認識共有〉は、聞き手に情報を提示したうえで自分の話を進めていこうというものだが、〈情報提示〉は、相手の反応をうかがいつつも、求められた情報をあくまで提示するだけである。

なお、〈情報提示〉の「ネンナ」は、次のような標準語の「んだよね」に相当する。〈情報提示〉という用語と以下の例文は、市村 (2015) によるものである。

(43)　(A が B に大学へ行くのに何時のバスに乗るかを聞いている場面)
　　A：10 時からだから、何時のん乗る？
　　B：うーんとねー。
　　A：8 時 17 分のバスに乗っていけばいいよね。
　　B：うーん、それだと多分ちょっと早いんだよね。
　　A：でも 9 時では遅いでしょう。遅いもん。10 時からでしょう。

(市村 2015:162)

(43) において B は、「8 時 17 分のバスに乗っていけばいいよね」と言う A に対して、「そ

れだとちょっと早い」という情報を、「んだよね」をつけて提示している。この「んだよね」は「のよね」にも置き換えることができるが、「んだね」「のね」とすると不自然になるか、意味が異なる。(43)における「ちょっと早い」は、B が判断したことであり、A が知らない情報である。ここで「んだね」とすると、「ちょっと早い」ことを B が把握したことを言語化していると解釈されるか、B が A に「ちょっと早い」という命題の真偽判断の確認をしていると解釈される。つまり、4.1 節で取り上げた〈確認要求〉あるいは〈把握〉と同様に解釈される。また、「のね」とすると、〈確認要求〉と〈把握〉、および〈認識共有〉のいずれかで解釈される[19)]。以上のように、〈情報提示〉の「んだよね」においては、「だ」は必須ではないが「よ」は必須である。

そして、この「んだよね」に大阪方言の〈情報提示〉の「ネンナ」が対応する。

(44) A：8 時 17 分のバスに乗って行ったらええよな。
B：うーん、それやと多分ちょっと早い｛ネンナー／?ンヤナー[20)]｝。

以上のように、〈情報提示〉の「ネンナ」は、標準語における〈情報提示〉の「んだよね」に相当すると考えられる。

以上、「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」の 2 つめの用法として、〈情報提示〉を取り上げ、それが標準語の「んだよね」に相当することを述べた。

5. 「ネンナ」からみるンヤとネンの意味の違い

前節では、「ネンナ」を「ンヤナ」と置き換えられるかどうかという観点で分類してきた。まとめると以下のようになる。

① 「ンヤナ」と置き換えられる「ネンナ」
〈確認要求〉：聞き手も知っている（はずの）ことを聞き手に確認する
〈把握〉：話し手が発話時に把握したことを言語化する

② 「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」
〈認識共有〉：聞き手が知らない情報を前置きとして提示する
〈情報提示〉：聞き手が知らない情報を聞き手の反応をうかがいつつ提示する

このうち、本稿で注目したいのは②である。なぜなら、「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」が持つ意味が、ンヤにはないネンが持つ固有の意味領域であると考えられるからである。そこで、本節では、対応する標準語の形式と対比しつつ、②の「ネンナ」が持つ意味特徴を明らかにする。以下、5.1 節では〈認識共有〉の「ネンナ」と「のね」を対比し、5.2 節では〈情報提示〉の「ネンナ」と「んだよね」を対比する。そして、5.3 節ではそれを踏ま

19）このように、4.1 節で取り上げた〈確認要求〉および〈把握〉の「ネンナ」「ンヤナ」は、標準語の「のね」および「んだね」に相当する。

20）この場合、「ンヤナー」の使用も完全に不適切とは言い切れない。これには、「多分」という語が共起していることが関係すると考えられる。すなわち、「多分」が共起することで、提示する命題内容が、話し手がその場で把握したことを表しているという解釈が可能になるのである。そのため、次のように、「話し手が既に知っている情報」ということがわかるような文脈であれば、「ンヤナー」の許容度が下がる。
（ア）いや、さっき調べたけど、それやとちょっと早い｛ネンナー／#ンヤナー｝。

えて「ネンナ」固有の意味特徴を明らかにする。

5.1.　〈認識共有〉の「ネンナ」と「のね」

4.2.1 節で述べたように、〈認識共有〉の「ネンナ」は、標準語の「のね」に相当する。以下に「ネンナ」の例を再掲する。(46) はそれを標準語に翻訳したものである。

(45) あんなー、今度出張で福岡行く｛ネンナ／#ンヤナ｝。でもホテルが全然空いてへんねん。((29) 再掲)

(46) あのね、今度出張で福岡に行く｛のね／#んだね｝。でもホテルが全然空いていないんだよ。

(45) からわかるように、この〈認識共有〉用法において、大阪方言では「ネンナ」が使えるが「ンヤナ」は使えない。一方、(46) からわかるように、標準語では「のね」が使えて「んだね」が使えない。これらのことから、〈認識共有〉用法で使用できるのは、コピュラの「ヤ」「だ」を含まない形式に終助詞「ナ」が後接した形式であることがわかる。

では、コピュラの有無と〈認識共有〉用法にはどのような関係があるのだろうか。それは、大阪方言と標準語のどちらにおいても、話し手の判断を含まない「確定した」情報を聞き手に提示する際にはコピュラのない「ネン」「の」という形式が使用されるからだと考えられる。この点に関して、野田 (1993) を引用しつつ標準語の「のだ」と「の」の違いを述べる。まずは 5.1.1 節で標準語の「の」と「のだ」について述べ、それを踏まえて 5.1.2 節で大阪方言のネンと「の」が対応することを述べる。

5.1.1.　「の」と「のだ」の違い

野田 (1993) では、以下のような例を挙げて平叙文における「のだ」と「の」の違いを説明している。

(47) あの人、来ないね。きっと忙しいんだ。

(48) ??あの人、来ないね。きっと忙しいの。

(49) おれ、行かない。忙しいんだ。

(50) 私、行かない。忙しいの。　　(以上、野田 1993:44-45)

上記の (47) から (50) は、ノダ文が直前の文に対する説明となっている。(47) と (48) は、「あの人が来ない」という状況から、「(あの人は) 忙しい」という帰結が導き出されており、「の」は不自然である。一方、(49) と (50) においては、「(話し手が) 忙しい」ということは既に確定しており、「んだ」と「の」の両方が使える。以上のことから、(47) (48) と (49) (50) の違いは、話し手の判断を述べるか否かという点にあり、「の」は話し手の判断を述べる際には用いられにくいと野田は指摘している。

(46) において「の」が用いられて「んだ」が用いられないのは、このことの裏返しだと考えられる。つまり、話し手の判断を述べる際には「の」よりも「んだ」が用いられるため、〈認識共有〉のように話し手の判断を介さずに一方的に聞き手を引き込もうとするような

場合、「んだ」はそぐわないのではないかと考えられる[21)]。

さらに、野田（1993）は、「の」は心内発話や独話では用いられないことも指摘している。

（51）そうだ、明日は会議があったんだ。

（52）*そう、明日は会議があったの。

（51）と（52）は「把握」の用法[22)]で、聞き手を必要としない発話だが、この場合「の」は使えない。一方で、「の」は（50）のような聞き手に向けられた発話とは相性がいい。

以上のように、「話し手の判断を表さない」「聞き手を一方的に引き込む」という性質により、〈認識共有〉においては「んだね」ではなく「のね」が使用されるのだと考えられる。なお、「んだね」が不適格な一方で「んですね」なら許容されるのは、「です」が常に聞き手目当て性を持つことが関係すると考えられるが、詳細は別稿に譲りたい。

なお、文末環境における「のだ」と「の」の意味的な性質の違いが、〈認識共有〉用法のようにいつでも保持されるとは限らない。例えば、ノダ相当形式に「ね」が後接した場合でも、4.1 節で取り上げた〈把握〉用法では、次に示すように「の」と「のだ」の両方が使用可能である。

（53）あの人、来ないね。きっと忙しい｛のね／んだね｝。

（53）は、（47）と（48）に「ね」を後接させたものである。文末においては「の」が不自然だったが、「のね」であれば不自然さはない。コピュラの有無による意味の違いはほとんどなく、性差が感じられる程度である。このことは、大阪方言における〈把握〉の「ネンナ」が「ンヤナ」に置き換え可能であることと平行的である。

以上、標準語における「の」と「のだ」の意味の違いについて整理した。「話し手の判断を介さず」「聞き手に一方的に伝える」場合には「のだ」よりも「の」が使われやすく、その違いが「ね」が後接した〈認識共有〉の場合にも保持されるのである。

5.1.2. ネンと「の」の対応

前節で述べた標準語の「の」と「のだ」の違いは、大阪方言のネンとンヤの違いとほぼ平行的である。つまり、ネンは「の」に対応し、ンヤは「のだ」に対応するのである。コピュラの有無という点でも対応している。（47）から（50）を大阪方言に翻訳した次の例に示すように、文末環境においては、話し手のその場での判断を表す際には、ネンが使いにくい。

（54）あの人、けーへんな。たぶん忙しい｛??ネン／ンヤ｝。

（55）おれ、行かへんわ。忙しい｛ネン／ンヤ｝。

（54）を（47）（48）と比べると、ネンが「の」に対応していることがわかる[23)]。

21）話し手の判断を述べない（49）で「んだ」の使用が可能であり、「ね」が後接した〈認識共有〉の用法において「のだね」が使えないことと矛盾するように思われる。これは、「ね」のような性質を持った形式が続かずに文が終わっているためだと考えられる。

22）4.1 節で取り上げた「ネンナ」や「のだね」の〈把握〉とおおむね同様のものだが、ここでは〈把握〉とは区別して「把握」としておく。

23）（47）の「の」と（54）の「ネン」がどちらも不適格とまでは言えないのは、「判断」の程度によるものだと考えられる。様々な根拠から、「（あの人が）忙しい」ことを、発話時に推測しているような場合は「の」および「ネン」の許容度が低くなるが、「どうせいつもの

以上のことから、〈認識共有〉の「ネンナ」が「ンヤナ」に置き換えられないことも、〈認識共有〉の「のね」が「んだね」に置き換えられないことと平行的に解釈できる。大阪方言と標準語のどちらにおいても、コピュラの有無によるノダ相当形式の意味の違いが、文末環境だけでなく、終助詞「ナ」および「ね」が後接して〈認識共有〉として機能した場合にも保持されるのである[24)]。

5.2.　〈情報提示〉の「ネンナ」と「んだよね」

次に、〈情報提示〉の「ネンナ」について検討する。4.2.2 節で述べたように、〈情報提示〉の「ネンナ」に相当する標準語の形式は「んだよね」である。以下に例を示す。

（56）　A：来月のゼミ旅行、行く？
　　B：いやー、どうしよ。迷ってる｛ネンナー／#ンヤナー｝。（（22）再掲）

（57）　A：来月のゼミ旅行、行く？
　　B：いやー、どうしよう。迷ってる｛んだよねー／#んだねー｝。

（57）は（56）を標準語に置き換えたものである。ここからわかるように、〈情報提示〉用法では「んだよね」が使用され、「んだね」にはならない。なお、この場合、以下に示すように「だ」は必須ではない。

（58）　A：来月のゼミ旅行、行く？
　　B：いやー、どうしよう。迷ってる｛のよねー／#のねー｝。

以上のことから、〈情報提示〉の「んだよね」においては、「だ」の有無ではなく「よ」の有無が問題であることがわかる。

このことを踏まえると、大阪方言における〈情報提示〉の「ネンナ」は、標準語における「んだよね」および「のよね」に相当し、「んだね」および「のね」には相当しないことがわかる。そして、標準語において〈情報提示〉の「んだよね」が「んだね」に置き換えられないのと同様に、大阪方言においても〈情報提示〉の「ネンナ」は「ンヤナ」に置き換えられない。したがって、大阪方言の「ナ」が標準語の「ね」に相当すると考えると、〈情報提示〉の「ネンナ」における「ネン」は「の（だ）」ではなく「の（だ）よ」に相当すると言える。日本語記述文法研究会編（2003:242）によると、「よ」は「その文が表す内容を、聞き手が知っているべき情報として示すという伝達態度を表す」という。この記述から考えると、「のだよ」に相当するネンは、「のだ」に相当するンヤに比べて、聞き手への伝達態度が強く表されると言える。

このような、ネンが「のだよ」に相当するという考えは、2.2 節で引用した先行研究にも見られる。「念を押し、気持ちを強める」という山本（1962）の記述や、前田（1977）や尾上（1999）で紹介されている「ネンが足らんは念が足らん」という大阪の商家で用いられた

ことだ」というようにほとんど推測していないような場合は、「話し手の判断を介さない」に近くなり、「の」と「ネン」の許容度が高くなる。このことは、2.2 節および 3.1 節で取り上げた「命題処理度のスケール」に深く関わるものであるため、詳細は別稿に譲りたい。

24）4 節冒頭で述べたように、「ンヤナ」はコピュラのない「ンナ」という形をとらない。

慣用句は、このことを反映していると考えられる。また、中井（1997）や真田監修（2018）による「「ネン」が「のだよ」に相当する」という主旨の記述も同様である。

以上の先行研究からもわかるように、ネンは「ンヤ＋α」であるという母語話者の直感があり、それを標準語の「のだ」と「のだよ」の差に置き換えて解釈されることがある。そして、「のだよ」相当として表現されるネン固有の意味特徴が如実に表れたのが〈情報提示〉の「ネンナ」であると考えられる。

5.3. ネンの意味的な特徴

本節では、「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」における「ネン」がどのような意味特徴を持つかということを、対応する標準語の形式と対比しながら議論してきた。ここまでに明らかにしたことは、以下の表 1 のようにまとめられる。

表 1 「ンヤナ」「ネンナ」の用法と対応する標準語形式

	〈把握〉	〈確認要求〉	〈認識共有〉	〈情報提示〉
ネンナ	○	○	○	○
ンヤナ	○	○	×	×
のね	○	○	○	×
んだね	○	○	×	×
のよね	—	—	—	○
んだよね	—	—	—	○

○:使用できる ×:使用できない —:議論の対象外

表 1 において、「—」は当該の形式と用法の組み合わせが、そもそも議論の対象外であることを表す。標準語の「のよね」「んだよね」が関係するのは〈情報提示〉のみであり、他の用法には関係しない（そもそも対応しない）ため、「—」としている[25)]。

この表からもわかるように、「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」は〈認識共有〉と〈情報提示〉の用法を持つ。〈認識共有〉の「ネンナ」における「ネン」は、標準語の「のだ」ではなく「の」に対応する。これは、話し手の判断を介さずに聞き手に一方的に提示する場合にはコピュラのない「の」が使われやすいという文末環境における性質を引き継いだものと考えられる。

また、〈情報提示〉の「ネンナ」における「ネン」は、標準語の「んだよね」および「のよね」に相当する。この場合は、コピュラの有無は関係なく、「ネン」が「の（だ）」ではなく「の（だ）よ」に対応するからこそ、「ナ」と組み合わさって〈情報提示〉の用法で使用

25)「明日も仕事あるんだよね」のような〈確認要求〉の「のだよね」「のよね」もあるが、〈確認要求〉用法の「ネンナ」は「ンヤナ」と置き換えが可能であり、本稿の議論の中心ではないため、表 1 では「—」としている。本稿で標準語形式を引き合いに出すのは、「ンヤナ」と置き換えられない「ネンナ」の意味・機能を分析するためである。

が可能になっているのだと考えられる。「よ」の分だけ「聞き手に一方的に伝えようとする」伝達態度を積極的に表していると言える。

一方、「ンヤナ」との置き換えが可能な〈把握〉〈確認要求〉の「ネンナ」は、〈認識共有〉と〈情報提示〉の「ネンナ」が持つ「話し手の判断を介さない」「聞き手に一方的に伝えようとする」といった性質を持たない。〈把握〉用法は聞き手への伝達を志向するものではないし、〈確認要求〉用法は「一方的に」伝えようとするものではない。これらの用法は、ネンとンヤが「中和」した（3.2 節）領域、すなわち、ネンとンヤの意味が重なる領域であると考えられる。このように、ネンが独自に表す意味領域がある一方で、ンヤと共通する意味領域も存在する。

以上の議論を踏まえて、本稿で明らかにしてきた「ネンナ」の意味的な特徴を、野間（2013）における文末の「ネン。」と対照してみたい。その意味的な特徴の共通点から、〈認識共有〉および〈情報提示〉の「ネンナ」は、野間（2013）でいう「命題処理度」がかなり小さい用法に位置づけられる。以下の例を再掲する。

（59）（唐突に）あんなー、おれ今度東京に行く｛ネン／??ンヤ｝。（(17) 再掲）

この例では、「おれ今度東京に行く」という内容が話し手の頭の中で「処理済み」であり、それを一方的に聞き手に伝えている。このような場合、「ネン。」が好んで使用され、「ンヤ。」は不自然になる。すなわち、「話し手の判断を介さない」「聞き手に一方的に伝える」というのが「ンヤ。」にはない「ネン。」固有の意味的な特徴であり、これは「ンヤナ」にはない「ネンナ」に固有の意味特徴とおおむね一致する。

3.1 節で述べたように、野間（2013）の「命題処理度のスケール」には不十分な点があり、さらに 3.2 節で指摘したように、文末環境における「ネン。」と終助詞「ナ」が後に続く「ネンナ」を同列に論じることには慎重になるべきだと考える。しかし、「ンヤ。」にはない「ネン。」の意味特徴と、「ンヤナ」にはない「ネンナ」の意味特徴がこれほど類似していることから、「話し手の判断を介さない」「聞き手に一方的に伝える」という意味特徴は、「ンヤ」にはない「ネン」に固有の意味特徴と考えることは、一定の妥当性があると考える。

6. まとめ

本稿では、「ネンナ」という形式を、「ンヤナ」に置き換えられるかという観点で分類し、そこから「ネン」が持つ意味的な特徴を記述した。明らかにしたことは以下のようにまとめられる。

(a)「ネンナ」の持つ用法のうち、〈確認要求〉と〈把握〉は「ンヤナ」に置き換えることができ、〈認識共有〉と〈情報提示〉は「ンヤナ」に置き換えることができない。

(b)「ンヤナ」に置き換えられない〈認識共有〉と〈情報提示〉の「ネンナ」には、「話し手の判断を介さない」「聞き手に一方的に伝える」という共通した意味特徴がある。「ンヤナ」に置き換えられる〈把握〉および〈確認要求〉の用法はこの特徴を欠いている。

(c)「ンヤナ」にはなく「ネンナ」に固有の意味特徴は、文末の「ネン。」が持つ「ン

ヤ。」にはない固有の意味特徴とおおむね一致しており、ここから、少なくとも文末および「ナ」が続く環境においては、「話し手の判断を介さない」「聞き手に一方的に伝える」が「ネン」に固有の意味特徴であると考えられる。

本稿で明らかにしたことは、ネンとンヤが重なる意味領域における両形式の意味的な違いを明らかにするうえで役に立つと考えられる。しかし、本稿で中心的に扱ったのはネンに固有の意味領域であり、ンヤと「中和」する現象についてはほとんど扱えなかった。「中和」の問題にアプローチするためには、「ナ」以外のノダ相当形式に後接する形式についても記述を深めていく必要がある。

付記　本稿は、JSPS 科研費 26244024、18K12398 による研究成果の一部である。

【参考文献】

市村葉子（2015）「『んだよね』の発話意図を解釈する手がかりとは？―発話意図と音調との対応関係に注目して―」日本語／日本語教育研究会編『日本語／日本語教育研究』6, pp.149-164, ココ出版.

大野仁美（2015）「南紀方言における『ノダ』相当形式と終助詞」『言語と文明』13，pp.123-134, 麗澤大学大学院言語教育研究科.

小笠原千絵（2014）「若者の会話に見られる『ネン』―『タネン』の出現―」『近畿大学日本語・日本文学』16，pp.157-177，近畿大学文芸学部.

尾上圭介（1999）『大阪ことば学』創元社.

神部宏泰（1996）「播磨方言における断定辞の推移―『ネン』『～テン』の成立とその機能―」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点（上）』pp.63-79，明治書院.

岸江信介（2000）「大阪府泉南方言の分布と動態―『大阪府言語地図』と『大阪市～和歌山市間方言グロットグラム』を通して―」『言語文化研究』7，pp.185-220，徳島大学総合科学部.

京野千穂・堀江薫（2016）「上昇調の終助詞ネがノダ文と非ノダ文に付く場合―意味機能の異なり―」『音声研究』20-2，pp.68-76，日本音声学会.

小杉孝二（2003）「大阪弁『ネン』の変遷―上方落語を中心に―」『地域言語』15，pp.33-50，地域言語研究会.

真田信治監修（2018）『関西弁事典』ひつじ書房.

高木千恵（2018）「大阪方言の補充疑問文と終助詞ナ・イナについて―形態統語的な特徴を中心に―」『待兼山論叢　日本学篇』52，pp.39-56，大阪大学大学院文学研究科.

――――（2019）「大阪方言におけるノダ補充疑問文と終助詞ナ」『阪大社会言語学研究ノート』別冊，pp. 15-34，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

中井幸比古（1997）「総論」平山輝男ほか編『日本のことばシリーズ 26　京都府のことば』pp.1-26，明治書院.

中西彩乃・沖裕子（2011）『大阪摂津方言若年層談話文字化資料』信州大学大学院人文科学研究科.

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』くろしお出版.

野田春美（1993）「『のだ』と終助詞『の』の境界をめぐって」『日本語学』12-11，pp.43-50，明治書院.

————（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版.

————（2002）「第 8 章　終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書 4　モダリティ』pp.261-288，くろしお出版.

野間純平（2013）「大阪方言におけるノダ相当表現―ノヤからネンへの変遷に注目して―」『阪大日本語研究』25，pp.53-73，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

————（2014a）「近畿方言におけるネン・テンの成立―昔話資料を手がかりに―」『阪大日本語研究』26，pp.51-69，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

————（2014b）「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン―ノンの分布を中心に―」『阪大社会言語学研究ノート』12，pp.24-36，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

前田勇（1977）『大阪弁』朝日新聞社.

松丸真大（1999）「京都市方言における『ノヤ』『ネン』の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1，pp.61-73，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

山本俊治（1962）「大阪方言『ネン』」『国文学攷』27，pp.25-29，広島文理科大学国語国文学会.

のま　じゅんぺい（島根大学講師・大阪大学大学院修了生）